北東アジアの平和と安定：米中対決と日本の役割

2019年1月19日

中国文化大学ワークショップ

京都産業大学　東郷和彦

アメリカ

- 冷戦が終わって30年（89/91）。依然として世界第一の強国。しかし、一人勝ちの時代から、イスラムのチャレンジ（01）、経済苦境（08）、中国の挑戦（17）に直面。
- トランプ＝「アメリカ第一」＝力の復活。貧困白人の救済。経済は二国間主義。安保は軍事力の活用。
- 中国＝対決＝貿易不均衡・技術面での猛追・サイバー優位を通ずる新冷戦＝共和・民主一致
  北朝鮮＝対話に飛び込む
  ロシア＝無用な対決せず（全体は「反プーチン」）
  日本＝なぜか調和
  韓国＝不即不離

中国

- 鄧小平の改革開放から40年。韜光養晦は08年で抜け出す。
- 習近平時代＝「一帯一路」（13年）・「社会主義現代化強国」49年に米国を凌駕（17年）・習近平の権威主義体制（18年）。
- アメリカとの対決に注力。
- ロシアは最良、北朝鮮・韓国との関係良好、日本とも改善に努める。多数国主義の旗印。ユーラシア大陸を背景とする地域主義。

北朝鮮

- 金日成・金正日・金正恩の王朝独裁政治。体制維持＝国家維持。11年12月正恩体制。
- 核・ミサイルによる体制維持。6回の核実験と12回のミサイル実験（正恩で核4、ミサイル8）。
- 2017年はトランプとの間の舌戦で緊張激化。
- 2018年から経済建設路線に転換。4月板門店で文在寅と6月シンガポールでトランプと会談。
- トランプは従来の「積み上げ外交」方式を覆し、金が望む体制保証を会談により事実上付与。
  ➔北は、核・ミサイルとのダブル保証が最善。
  ➔米国にとっては、長期的には、経済発展と社会開放による脅威の消滅が目標となる。
  ➔当面は、段階的な削減と制裁解除。

韓国

- 文在寅政権は、盧武鉉政権につぐ、革新の市民運動派政権。「親北朝鮮・反米自立・反日歴史問題許さず」を背景に有する。
- 前任が保守の朴槿恵政権で、崔順実ゲートで弾劾辞任したことにより、朴時代の成果の全否定も、背景に有する。
- 2018年1月の北の政策転換を見事に活用、南北対話のリーダーの役割を希求。成果あり。
  ➔米国・中国ともに了解をとる必要。薄氷の上。
- 徴用工大法院日本企業有罪確定判決（10月）・慰安婦「和解・癒し財団」解体（11月）で、対日関係大きく冷却化。安倍政権は当面「静観」の構え。

ロシア

- プーチン政権登場から19年、2007年ごろから米欧との対立が表面化。ロシア・グルジア紛争（08年）、ウクライナ市民戦争とロシアのクリミア併合（14年）で対立は極大化。迎撃ミサイル、INF協定廃棄等でさらに対立は進行。
- この間ロシア・中国関係は急速に親密化。しかし隣国中国の巨大成長の余波もあり。
- 北朝鮮問題ではおおむね中国を支持。対韓国関係は良好だが、そこまで。韓半島への長期的戦略的取り組みに関心。
- G7の一員日本との関係改善に関心。

日本

- 安倍内閣6年の間に、外交安保面での成果は顕著。
- ①米国：平和安保法制（9条解釈改憲➔非対称改正＋平和主義維持）、トランプとの対話。
- ②中国外交：抑止拡大、「一帯一路」協力17年～。
- ③中国韓国・歴史：15年談話「忘れない謙虚さ」➔朴政権との慰安婦合意。
- ④北朝鮮：板門店宣言後の対話参加路線。
- ⑤残る外交レガシーは一つ：日ロ平和条約。

米中対決の意義

- アメリカは、「貿易不均衡・技術面での猛追・サイバー優位」を通ずる新冷戦を覚悟。
＋リベラル民主主義棄損の危機感。
- 中国は、アヘン戦争・抗日戦争の屈辱と共産党指導国家の建設の苦難を乗り越えようやく世界の超大国となり、2049年に米国を凌駕する目的を建てた。
＋新中華としての価値意識に立っている。

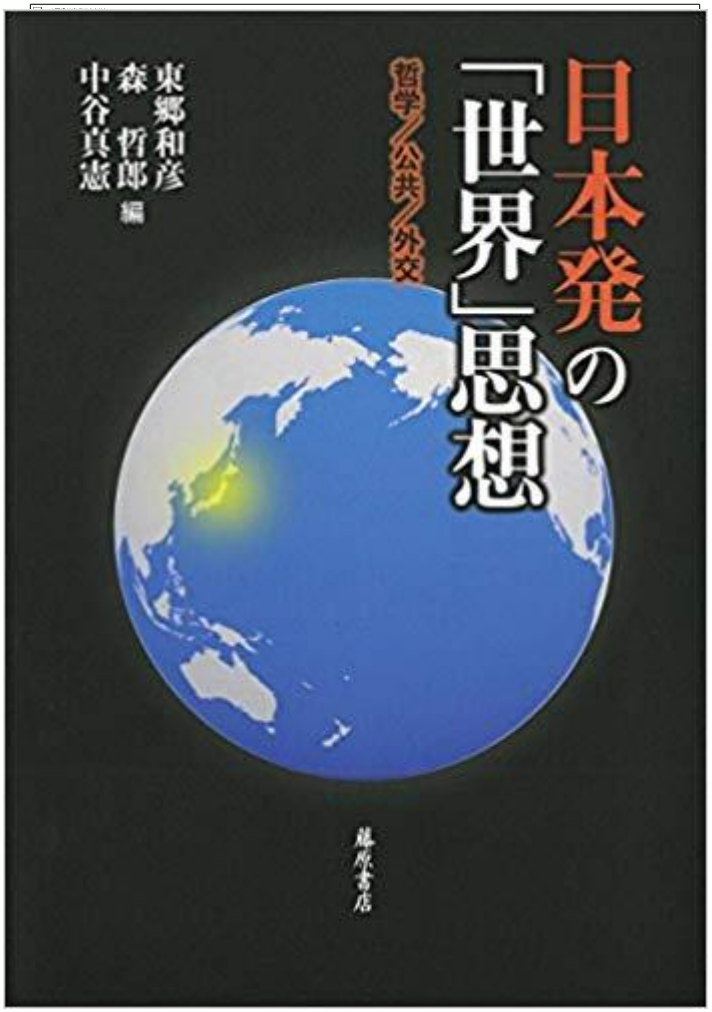
周辺国の状況

- ASEAN＝中国の力は強大。海洋ASEAN（ベトナム・フィリピン・インドネシア）は、南シナ海・九点線の権益で中国と衝突。大陸（ベトナム・カンボジア・ラオス・タイ・ミャンマー）は、メコン川下流域として、上流の中国と対立。➔米国の存在は必要、しかし超大国の激突を望まず。
- インド＝中国とともに巨大人口。アジア文明の雄。共にBRICSの一員。他方、領土衝突。対立国パキスタンに近い。➔米国とも近い関係。

日本の役割

- 明治以降欧米より、WWII以降アメリカより、民主主義と法の支配を学んできた日本。外交の基軸として、日米安保を。
- 同時にアジアの一員。隣接国はまず中国。江戸は中華世界の中での自立国。「アメリカと完全に価値が同じ」と言われると多数は違和感あり。
- 米中激突の下で、日本の自立性が試されている。「日本発の世界思想」こそ問われている。答えは、歴史と、哲学の中にあるのではないか。➔「和の外交」の安倍内閣における最終実践こそ、日ロ平和条約の締結といってもよいのではないか。

『日本発の「世界」思想』



- 東郷和彦・森哲郎・中谷真憲編著
- 『日本発の「世界」思想 哲学・公共・外交』
- （藤原書店、2017年1月）
- 「根」としての哲学：無
- 「幹」としての公共：間
- 「枝」としての外交：和